

やまこせのクワ

桑の葉は蚕の主な餌であり、養蚕は江戸時代（1603-1867 年）中期から明治時代（1868-1912 年）にかけて白川の人々の主な収入源であった。合掌造り、つまり傾斜した屋根の下に広々とした立体的な屋根裏を持っている家、が盛んになったのも養蚕の影響だった。屋根裏は、妻側に設けられた窓から日光や風が入り、日当たりや風通しの良い空間となっており、格子天井から立ち上る囲炉裏の熱で暖かく乾燥した状態が保たれている。そのため、寒さや湿気に弱い蚕の飼育に適していたのである。

温泉宿「白山荘」の近くにある 4 本の桑の木は、この合掌造りの家屋の住人だったヤマコセ家が 19 世紀半ばに家を建てたときに植えたものである。

庄川流域には耕地が少ないため、桑は山の中腹で、しかも離れた場所に複数の小区画を設けて栽培するのが一般的だった。そのため、葉の収穫に手間がかかり、経済的に余裕のある家では、より多くの葉をつける木を品種改良して、谷間に植えていた。ヤマコセの木もその結果だと考えられている。